

益田市市長
山本浩章

故郷を離れ、岡山で医学の基礎を修め、東京で研究に没頭し、神戸や和歌山で実地の感染症対策に当たった秦佐八郎は、30代半ばにして当時の医学最先進国であるドイツに留学しました。

そのさなか、ベストに関する研究発表をベルリンで行なった際、運命的な出会いがありました。歩み寄ってきた見知らぬ老紳士から不意に「長年のベスト研究の間、危険はなかったかね」と尋ねられ、「多少の危険はありますが、注意すれば問題ありません。牢屋の罪人にやられるようでは看守失格です」と答えたのですが、この豪胆で自信に満ちた回答に感服した質問者こそ細菌学の大家パウエル・エールリッヒ博士だったのです。相当の困難が予想される梅毒の研究に臨み、信頼できる片腕を求めていた博士としても、これ以上ない逸材を掘り当てたわけです。

新しい特効薬の開発は気の遠くなるような注意と忍耐を要しました。様々な薬剤の配分を毎回わずかずつ変化させ、試行と失敗を際限なく繰り返すという苦行の末、明治43年4月、ついに人類初の化学製剤

「サルバルサン606号」が完成しました。「魔法の弾丸」と呼ばれたサルバルサンは単に梅毒を治すだけでなく、医学全体を大きく前進させるものでした。人類にとつて長らく有効な治療の手立てがなかった感染症に対し、化学物質の持つ特殊な毒性を利用して病原体の増殖を抑える化学療法はまさに画期的だったのです。その後同様の手法で多くの科学者により次々と新しい化学薬品が発見され、地球上の多くの病気が克服されました。

秦佐八郎の生涯は転機の連続でしたが、誠実な人柄も手伝い、常に周囲から温かく理解され、期待されるといふ幸運に恵まれました。そしてこれに報いようとする強い使命感こそが、天賦の才能を開花させ、ついに医学の新しい扉を開くに至らせた超人的努力の源泉だったのです。

秦佐八郎は昭和13年11月22日、65年の生涯を閉じました。没後80年となる今年の顕彰事業では、その偉業に改めて光が当たります。

6月号の「市長室からこんにちは」において、市役所西側出入口脇に設置されたアユのモニュメントについて、「益田ロータリークラブさんから贈られた」とした説明は誤りでした。正しくは「国際ロータリー第2690地区(2014-2015年度ガバナー松本祐二・益田西ロータリークラブ所属)様から地区大会記念事業として贈られた」でした。お詫びして訂正します。

益田市の歴史文化の特色(全7回)

最終回

民衆の生活とともにあり、
今も息づく益田の芸能

■市文化財課 ☎31・0623

益田市内では、神楽をはじめ、地芝居、囃子田(田植え囃)、獅子舞など、個性豊かな芸能が民衆の生活とともにあり、それは現在も人々の暮らしとともに息づいています。

高根県の無形民俗文化財に指定されている三葛神楽はゆつたりとした六調子打ち切りという形式で、石見地方の六調子系の祖型を伝承しています。

高津川流域では地芝居も盛んでした。中垣内町の白岩神社の廻り舞台は県内においても例が少なく、「うつうた一座」の舞台として実際に使われていることも含め、貴重です。

豊作を願う神事から鑑賞芸能へと派生した囃子田が市内各所に継承されており、道川や内谷のものは、それぞれ特徴は違うものの、古い型を残しています。また、土佐本田植草紙は、中国山地の田植歌の古い形を記録したものと

注目されます。

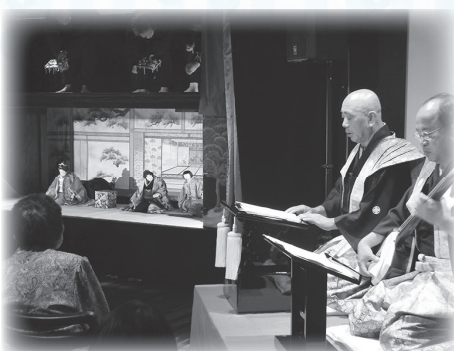
獅子舞も古い獅子頭が各地に残されており、各地の神社で興行されてきたと見られます。

益田糸操り人形は明治時代に益田に伝わったものですが、四つ目と呼ばれる手板を使う操演方法が古い形態をとどめているとされ、近年は海外公演を成功させるなど、注目が高まりつつあります。

これらの芸能は、歴史上のものではなく、現在も市民の生活の娯楽として息づいていることが何よりも貴重です。

※本連載および特集では紹介できませんでしたが、このほかに祈りと用いをテーマにした関連文化財を設定する予定です。

※1月号からは、「益田市の文化財の紹介」を掲載します。



益田糸操り人形の公演の様子